

# 戦後の大阪城における「豊臣の城」の発見 —1959年の大坂城総合学術調査を中心事例に—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-05-24 キーワード: 作成者: 能川 泰治, NOGAWA Yasuharu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/0002000640">https://doi.org/10.24517/0002000640</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



# 戦後の大阪城における「豊臣の城」の発見

## －1959年の大坂城総合学術調査を中心事例に－

能川 泰治

### はじめに

まず、現在の大阪城<sup>1</sup>について基本的なことを確認することから始めたい。現在の大阪城天守閣は、昭和天皇の即位を祝う大礼記念事業として、1928（昭和3）年に大阪市がその再建を発議し、1931年に竣工したものであり、その建設工事を請け負ったのは大林組である。それは、豊臣秀吉が1583（天正11）年に築いた天守を初代とした場合、三代目に相当する。なぜなら、大坂夏の陣による落城後に、徳川幕府は西国の諸大名を総動員して大坂城の再築工事に取り組み、1626（寛永3）年に天守を完成させているからである。ただし、そのとき再建された天守は約40年後の1665（寛文5）年に落雷のために焼失しており、次に天守閣が築造されるのは先述した1931年のことである。また、二代目天守を再建した際の修築工事は、1620（元和6）年に開始されてから、約10年後の1629（寛永6）年に至るまで、合計三期にわたって実施された大規模なものであり、このときに豊臣時代の大坂城は地下深くに埋立てられ、その上に新たな濠・櫓・石垣が築造された。つまり、現在の大阪城の土台は、徳川幕府による大坂城再築工事によって築かれたものなのである。

次に本稿の主題に即して指摘しておきたいことは、ここまで述べてきたように、現在の大阪城の濠・石垣といった土台は徳川幕府によって新たに築造されたものであるにもかかわらず、このことは戦後のある時期まで専門家の間でも周知されておらず、秀吉によって築城されたときの痕跡が部分的に残っているのではないかと推察されていたことである。そして、本稿で考察対象とするのは、現在の大阪城の土台の築造に関するあやふやな理解に終止符を打ち、現在の大阪城の濠と石垣は徳川幕府によって新たに築造されたもので、豊臣時代の痕跡は表面的にはどこにも残っておらず、地下深くに眠っていることを突き止めた学術調査である。その学術調査は、1959（昭和34）年に大阪市と大阪読売新聞社とが共催するかたちで実施された、総合的かつ大規模なもので、当時は「大坂城総合学術調査」（以下、総合調査）と呼ばれた。

本稿では、この総合調査がどのような経緯で始められたのかを再論するとともに、その歴史的意義を当該期の歴史的文脈に即して考えることを課題としている。以下、総合調査の概要を簡単にまとめたうえで（詳細はⅡ章で述べる）、関係する先行研究を整理しておきたい。

総合調査は、大阪城の西外濠の著しい水位低下の原因解明と、豊臣時代の遺構の存在を確認することを目的として始められた。まず1959年3月末から5月末にかけて、天守台の金明水井戸調査、石垣刻印調査、そしてサウンディングとボーリングからなる地盤調査がほぼ同時並行で実施された。これらのうち石垣刻印調査では、現存する石垣には豊臣時代の痕跡は存在しないことが明らかにされ、地盤調査では、現在の本丸の地下約10<sup>メートル</sup>の地点に石垣らしきものが存在する

ことが確認された。そして、それから半年後の 12 月に実施された発掘調査で、地下に眠る野面積みの石垣（以下、地下石垣）が発見され、その後の四半世紀にわたる調査活動を経て、この地下石垣が豊臣時代のものであることが確認されている。

次に関連する先行研究を整理しておこう。まず前提としなければならないのは、この総合調査では報告書が作成されなかったことである。そのため、総合調査の成果と全容は、歴史博物館としての大阪城天守閣（以下、天守閣）の展示や、天守閣の関係者および総合調査の当事者の著作を通じて、長い時間をかけて少しずつ明かされることとなった。

まず総合調査から約 10 年後の 1970 年前後の時期には、天守閣で特別展「大阪城の謎」が開催され、総合調査の際に天守閣主任学芸員として現場を主導していた岡本良一によって、大坂城の歴史に関する総合的な概説書が刊行された<sup>2</sup>。これらは、総合調査の全容を明らかにすることよりも、石垣刻印調査や発掘調査に言及しながら、それらによって明らかにされたことを伝えることに注力していた。例えば、岡本著書の場合、石山本願寺建立から徳川幕府による大坂城再築（以下、再築）に至るまでのプロセスと、再築の際の労働力編成および巨石運搬と石垣築造の技術を中心に叙述をまとめ、現存大阪城がどのように建造されたのかを伝えている。さらに、石垣刻印調査を主導した村川行弘は、刻印調査について詳述した著作をまとめ、総合調査の意義について、目的は豊臣時代の遺構の発見にあったが、結果として現存大阪城が徳川製であることの確認と証明をすることになった、と結論づけた<sup>3</sup>。

続く 1980 年代半ばには、豊臣時代の遺構を確認する調査活動の進展が反映されてのことと思われるが、再築の際に豊臣時代の大坂城が地下深く埋められたこととあわせて、そのことを解明した学術調査として総合調査が紹介されるようになった。例えば、当時天守閣の主任学芸員であった渡辺武の著作<sup>4</sup>では、再築について詳述した第三章に続いて、豊臣時代の遺構調査についてまとめた第四章を設定し、新事実を発見した画期的な学術調査として総合調査の全般的概要に言及することによって、再築の詳しい実態は総合調査によって明らかにされたことを伝えている。また、『大阪城天守閣紀要』の学術調査特集号では、総合調査の地盤調査を主導した村山朔郎が、地盤調査と発掘調査の経緯と成果を学術報告書形式にまとめた論稿を掲載しており<sup>5</sup>、調査終了から四半世紀を経た時期に、総合調査はその全容が明らかにされることになった。

以上のように、総合調査は 1970 年前後から 80 年代半ばにかけてその全容が明らかにされ、現存大阪城は徳川幕府によって再築されたものであり、豊臣時代の痕跡は地下深くに埋められていることを解明した画期的な学術調査であるという評価が確立された。そして、以後の大阪城研究では、そのような意義をもつ学術調査として大坂城の近現代史に位置づけられている<sup>6</sup>。

ここまで見てきたような、従来の大坂城研究による総合調査の評価を、筆者は否定しない。しかし、未検討課題は残されていると思う。それは、総合調査が実施された 1959 年前後、すなわち戦後復興から高度経済成長にかけての歴史的文脈に位置づける作業である。具体的な論点を挙げると、総合調査は大阪市と読売新聞が主催していることからして、一種のメディア・イベントとして位置づけられるはずであるが、従来の大坂城研究には総合調査をメディア・イベントとして考察した研究は見当たらない。

他方、日本の近現代におけるメディア・イベントに関する研究は 1990 年代から着実に蓄積されてきており、戦後に関しては、津金澤聰廣と有山輝雄らの共同研究によって、朝日・毎日・読売などの各新聞社が主催する博覧会などのイベントが、原子力の「平和」利用や観光事業による地域振興を推進するうえで大きな役割を果たしたことが明らかにされている<sup>7</sup>。

このような研究動向をふまえるならば、総合調査のメディア・イベントとしての側面に注目し、読売の営業戦略や大阪市の地域振興とどのように関係していたのかを考察することが未検討課題として残されていると言えよう。そして、そのような課題に取り組むことは、学術研究調査とメディアおよび地域振興との関わりを明らかにすることであり、ひいては、都市史研究の課題について考えたり、歴史学の研究成果は市民にどのように還元されるべきなのかという問題を考えたりすることにつながると思う。

## I、総合調査実施の背景

先述したように、総合調査は、大阪読売新聞社（以下、大読）と大阪市と同市教育委員会によって、文化財保護委員会（のちの文化庁）と大阪府と同府教育委員会の協賛を得るかたちで実施された。総合調査には報告書が作成されなかったことも先述したが、誰がどのように準備を進めてきたのかという点について、直接的な手がかりとなる文書も存在しない<sup>8</sup>。そこで本章では、大読の社史の記述や関連する新聞記事などの断片的な手がかりを集めて検討し、さらに敗戦直後から 1950 年代にかけての大阪城がどのような状況にあり、それを大阪市はどのように活用しようとしていたのかを辿ることによって、総合調査が始められる経緯を明らかにしたい。

### （1）読売新聞の大阪進出

1959 年 3 月 13 日の『読売新聞』朝刊の 1 面には、五段抜きで総合調査の実施を伝える社告が掲載された。そこには、冒頭で当時の皇太子の婚礼と大阪市制 70 周年の記念事業として総合調査を実施することを明記したうえで、調査団発足の経緯についての説明が記されている。その一部を以下に引用しておこう。

現在の城郭〔大阪城／能川〕は徳川氏が元和、寛永のころ（一六二〇―一六二九）西国三十余国の諸大名に命じて大修築し、さらに天守閣は長らく炎上のままだったのを、昭和六年、ご大典、大阪市制四十周年記念事業として再建されました。それから三十年、最近どうしたわけか濠の水が激減し、西外濠の一部はほとんど干上がったところもできてきました。三百余年間、一時的減水はあったとしても、現在のように完全に干上がったことは初めてのことといわれ、専門家でもその理由はナゾとされております。それというのも大坂城については、これまで個人的な文献調査、石垣調査などは行われても、科学的、総合的根本調査は行ったことがなかったからであります。

a そこで本社は、皇太子のご成婚、大阪市制七十周年に当り、過去、日光華厳の滝、鳴門渦潮など幾多の科学調査の経験を生かして、大坂城の科学的調査を発意するにいたりました。その規模は単に濠の水の干上がった理由を調べるばかりでなく、…（中略）…b 大坂城にかかわる一切のナゾを究明し、豊太閤の遺構を解明するものであります。<sup>9</sup>

(下線能川、半括弧原文)

前半部分に見られるように、総合調査が始められる直接のきっかけは、前年の 1958 年から顕著になった大阪城西外濠の水位低下である。そこで、下線部 b に明記されているように、その原因解明とあわせて「大阪城に関わる一切のナゾ」を解明し、豊臣秀吉の時代の遺構を明確にするために、これまで手がけてきた科学調査の経験を活かして大阪城の総合調査を企画したのであるという。さらに下線部 a には、読売新聞はこれまでも華厳の滝や鳴門の渦潮の調査にも取り組んでおり、その経験を活かして総合調査に取り組むことが明記されている。大読としては、これまで取り組んできた学術調査の延長上に総合調査を位置づけていることも窺えよう。それでは、大読はこれまでどのような目的でどのような調査を手がけてきたのか。

実は、社告の中で言及されている華厳の滝と鳴門の渦潮の調査は、いずれも 1956 年に実施されたものであり、この年から読売新聞は科学報道と学術調査団の組織に力を入れるようになっていた<sup>10</sup>。そのような動きの歴史的背景としては、前年の 1955 年から 1958 年にかけて、前人未踏の領域に科学技術を駆使した観測が及ぶようになったことを挙げておきたい。例えば、1955 年から翌 56 年にかけて、アメリカ・ソ連・イギリス・フランスが相次いで南極に探検隊を派遣しており、日本でも 1957 年 1 月に観測隊が「昭和基地」を設営している。さらに、1957 年 10 月にはソ連が世界初の人工衛星スプートニク 1 号の打ち上げに成功し、翌 58 年 1 月にはアメリカも人工衛星エクスポローラー 1 号を打ち上げた。

このように、総合調査が実施される 1959 年までの数年間は、宇宙を含めた未知の領域への科学的観測が世界的に活発になる時期でもあった。そして、このような時代の趨勢を見た読売新聞は、科学報道に力を入れると同時に、自ら学術調査団を組織して日本国内の未知の領域に科学的学術調査のメスを入れ、その経過を独占的に報道することを通じて販売部数拡大につなげようとしていたのである。そうして、1956 年の 1 月に華厳の滝の調査が、5 月に鳴門の渦潮の調査が実施されることになったのである。

そこで次に、大読が総合調査を主催する意図を明確にするためにも、1956 年に取り組まれた学術調査のうち、鳴門の渦潮の学術調査（以下、鳴門調査）を概観しておきたい。

鳴門調査は、1956 年の 4 月 10 日から 18 日にかけての予備調査を経て、同年の 5 月 7 日から 9 日までの 3 日間にわたって実施された。その調査団の構成は、主催者である大読の下に、海陸の自衛隊と徳島県および大学と気象庁に属する研究者が集い、総勢 200 人におよぶものであった。そして、多岐にわたる分野の専門家たちによって大がかりな調査が実施された結果、鳴門海峡の地形が幅 150 ㍎深さ 91 ㍎の V 字谷であることと、渦潮は紀伊水道と播磨灘の干潮の時間のズレに起因する激流が海峡を通過する際に形成されることなどが明らかにされた。

次に、この鳴門調査について注目すべき点をいくつか指摘しておきたい。一つは、鳴門調査を地元はどう受け止めていたのかという点である。

読売新聞の鳴門海峡調査には大賛成だ。本土と鳴門海峡を結ぶ海底トンネル（鉄道）淡路送電線の建設計画が持上っているときだし、海底の地質、地形、渦の成因がわかればわが国学界への大きな貢献となるほか、海峡の資源開発、観光面の発展など徳島県の受ける利益効果

と利益は大へん大きい。県は側面から全力をあげて協力、成功を願っている<sup>11</sup>。

上は、鳴門調査に期待を寄せる地元自治体の首長たちのコメントを伝える大読の特集記事の中から、徳島県知事・原菊太郎のコメントを引用したものである。このコメントからは、当時の鳴門が阪神地区と四国を結ぶ最短ルートの中継点として注目されていることと、鳴門調査が地元の観光事業の発展と水産資源の開発に寄与することも期待されていたことが窺える。そして、このような記事が掲載されること自体に、調査を実施することが対象地域の観光開発につながることを、大読は見通していることが窺えるであろう。

次に注目しておきたいのは、調査終了後にその成果がどのように報じられたかという点である。鳴門調査が実施されたのと同じ5月の末には、大阪・京都・神戸の三都市を移動するかたちで講演会が開催され、渦潮の動態と魚類の生態を調査した専門家と水中撮影に挑んだ大読の記者が、成果報告の講演を行っている。そして、約半月後の6月中旬には、大阪・阿倍野橋の近鉄百貨店で大読主催、徳島県・兵庫県・鳴門市・南淡町後援というかたちで「鳴門海峡学術調査報告展」が開催され、これには初日の午前中だけで約3000人がつめかけたという<sup>12</sup>。

これら一連のイベントについては、その開催地が大阪を中心とする京阪神地域であることに注意しておきたい。実は、1951年から経営陣に参画して読売新聞社を牽引することとなった副社長・安田庄司と常務・務台光雄との間で、読売新聞を関東ブロック紙から全国紙に成長させるべく大阪進出を目指すことで合意が形成され、前社長であった正力松太郎もこれを承認していた。そして、以後、関西で大きなシェアを占める朝日と毎日に対抗するために、読売新聞社は様々な販売部数拡大戦略を展開していたのである。先述の科学報道と学術調査への注力も、そのような販売部数拡大戦略の一環であり、その成果報告のためのイベントが大阪を中心に開催された理由も、以上のような大阪進出戦略の文脈で理解されるべきものなのである。

さらに、読売の大阪進出について指摘しておきたいのは、総合調査の前年すなわち1958年に、大読は商都大阪の復興と繁栄を祝うという名目で「大阪祭」（以下、半括弧を省略）を開催していたことである。この年に開催された第一回の大阪祭は、10月3日から同月26日にかけての期間中に、大阪城・中之島・天王寺の3公園を主な会場として20の展覧会と35の各種催しを開催するという大がかりなメディア・イベントであった<sup>13</sup>。それらの催しの中でも特に人気を博したのが、秀吉の大坂城入城を題材とする豊公入城行列である。これは、大阪府知事などの著名人が秀吉に扮してエキストラの家来を率いて市中を練り歩くという仮装行列であるが、初めて開催された1958年の場合は、出発点である大阪商工会議所前から「沿道を埋める市民の歓声と五色の紙吹雪を浴びながら駒を進め」、行列の終点である大阪城内には2万人もの見物客がつめかけ、歓声と拍手をもって行列を出迎えたという<sup>14</sup>。大読は、秀吉にあやかるイベントがいかに市民の関心を集めるかということも、既に察知していたものと思われる。

## （2）大阪城の戦災復興

次に、敗戦前後から1950年代にかけての大阪城はどのような状況にあり、それを大阪市はどのように活用しようとしていたのかを概観しておこう<sup>15</sup>。

まず、敗戦前後から1950年代前半にかけての数年間は、歴史遺産としての大阪城にとって受

難の時期であったと言ってよい。1945年8月14日のいわゆる第8回大阪大空襲では、米軍は大阪城の東側に広がる大阪砲兵工廠（当時の名称は大阪陸軍造兵廠）に集中爆撃を浴びせた。このとき天守閣は、爆弾や焼夷弾の直撃は免れたものの、直近の場所に複数の爆弾が投下されたため、天守台の石垣に沈下とズレが生じた。またこの時には複数の櫓が焼失し、城郭内でも本丸と二之丸のいたるところで石垣の崩落が相次いだ。

しかし、空襲によってこれだけの被害が出たにもかかわらず、大阪城には何ら修復の手が入ることなく何年も放置される状況が続いた。その大きな理由としては、敗戦直後から大阪城は米軍に接收され、占領軍による阪神地区統治の拠点とされたことと、その接收が解除された後も、大阪城は自治体警察制度の下で発足した「市民の警察」すなわち大阪市警察局（以下、市警）の拠点とされたことが挙げられる。まず、1945年9月29日に米軍によって接收されてから以後の大阪城は、日本にとっての戦局が悪化した1942年以降と同様に、市民の城内への立ち入りが許されなかった。その徹底ぶりは、1947年9月12日に米軍の失火によって本丸の紀州御殿が火災に見舞われた際に、駆けつけた消防隊も立ち入りを許されなかったほどであった<sup>16</sup>。

そして、1948年に進駐軍は大阪城本丸と二之丸の接收を解除して撤収するが、その時には既に市警による大阪城内の施設利用が進められていた。本丸に位置する旧第四師団司令部庁舎は市警の本部庁舎とされ、城内に現存する旧陸軍施設が警察組織の庁舎や学校として利用されたことにより、1950年代前半の大阪城はあたかも警察の要塞であるかのような雰囲気醸し出していた。そしてこの間に、現存する古建築物にさらなる被害を与えたのが、1950年9月3日に近畿地方に上陸した、ジェーン台風と呼ばれる大型台風である。このときの風水害によって、空襲の戦災を何とかくぐりぬけてきた櫓・門などの建築物は、屋根瓦が落ちたり壁が剥落したりするなどの被害を受けた。

以上のように、敗戦直後の大阪城は、戦災を被ったにもかかわらず何年も放置され、しかもその間に米軍のずさんな施設利用や台風による風水害によって、さらに荒廃が進むという状況にあった。そして、以上のような大阪城の荒廃を阻止するべく、大阪市が文化財としての大阪城の修復・保存に取り組み始めたのが1952年のことである。3月11日に大阪市は大阪府・大阪商工会議所・日本赤十字社とともに大阪城修復委員会を立ち上げ、応急修理のための寄付金募集を開始した。そしてこの間に、大阪城の文化財指定を国に働きかけた結果、大阪城は1953年3月に国から史跡に指定され、同年6月には城内の建造物13棟が重要文化財に指定された。

以上のような動きを受けて、市警は1955年に大阪府警察の下に統合され、その本部と関連施設は大阪城内から移転することとなった。そして、1960年代以降のことであるが、これまで大阪市警の本部庁舎として利用された旧第四師団司令部庁舎は1960年12月から大阪市の博物館として開館することとなり、同時に旧二之丸一帯の公園化も進めることとなったのである（公園化事業が完結するのは1970年の大阪万博開催を待たねばならなかった）。このように、空襲で被災してから8年にわたる受難の時期を経て、大阪城の歴史的景観を取り戻そうとする動きが急速に進められていたのである。

ところが、その矢先に異変が生じる。それが、先述した西外濠の水位低下である。大阪城の濠

の水位低下が始まったのは 1956 年からで、内濠と外濠共に年を追って水位が低下していたのであるが、そのうち潟水といってもよいほどに水位が低下したのが西外濠で、総合調査が始まる直前の 1959 年 3 月上旬の時点では、濠の底が露呈し、底にたまっていた木片や落石が見える泥沼に変貌するような状況であった<sup>17</sup>。そして、この西外濠の潟水が総合調査のきっかけとなるのであるが、その経緯については、西外濠の潟水を契機に石垣の調査や地盤調査などを実施することによって、豊臣時代の大坂城の解明に何らかの手がかりが得られるのではないかと考えられたのが、総合調査のきっかけであると、岡本良一が同著『大坂城』の中で語っている<sup>18</sup>。ただしこれは、あくまでも岡本のような城郭研究者にとっての関心を述べたものであって、これまで大阪城の修復と整備に尽力してきた大阪市の関心を代弁するものではない。それでは、大阪市の総合調査に対する期待と関心とはどのようなものなのか。

市民各位のご協力によって矢倉や石垣の修復をはじめ、造兵廠跡の公園化や警察の城外転出も実現しつつある矢先に総合学術調査により築城のナゾが解明されますことは文化史的にも史跡公園建設のうえからも誠に意義深く思います<sup>19</sup>。

大読は、1959 年 3 月 13 日の紙面で、総合調査に対する各方面からの期待の声を紹介する記事を掲載した。上の引用は、その中の大阪市長・中井光次のコメントを全文引用したものである。短いものではあるが、総合調査によって大坂城築城をめぐる謎が解明されることへの期待感を「文化史的にも史跡公園建設のうえからも」意義あることと述べていることに注目したい。実は、当時の大阪市は敗戦直後から大阪城の中央公園化計画を進めており、先述した修復運動の推進主体である大阪城修復委員会も、「郷土の貴重な文化財であり大阪の観光文化産業の象徴として大阪城の旧建造物を保存する」ことを目的として発足したものであった<sup>20</sup>。その公園化計画とは、1947 年に決定してから以後、規模や内容の変更を経て 1952 年から着工を開始したもので、城郭の東側に広がる旧砲兵工廠エリアすなわち杉山地区の 31 万坪を、緑地とスポーツ・文化施設からなる中央公園に改造し、市民の文化レクリエーションに資すると共に観光客誘致にも役立てようとしたのである<sup>21</sup>。これらのことを総合すると、大阪市長としては、大阪城内の古建造物に大阪城公園へ観光客を誘致する観光資源としての役割を期待していたのであり、総合調査にはその古建造物の歴史的価値を明確にすることを期待していたのであると言えよう。

### (3) 調査団の発足

本章の最後に、発足した調査団の構成についてふれておきたい。表 1 は総合調査の調査団メンバーを一覧表にまとめたものである。メンバーの人選に当たったのは、大阪市長の中井光次を委員長として、大阪市教育委員会委員長の神崎驥一と大読代表取締役の務台光雄、および調査団の団長・副団長と顧問を務める 4 名の学識者（村田治郎・末永雅雄・坂本太郎・魚澄惣五郎）で構成された大坂城調査委員会である。以上の 7 名の間で、人選をめぐる議論がいつどのようになされたのか、管見の限りでは直接の手がかりはない。そこで、ここまで述べてきた総合調査実施に至るまでの経緯をふまえることと、大読の記事や個々の履歴等を手がかりにすることを通じて、調査団の構成を通じて浮上してくる重要論点について、可能な限り言及したい。

調査団メンバーが確定したことを報じる大読の記事によれば、「“大坂城に科学のメス” を入れ

ることが重要な目的となっているため、調査団にとくに科学班をもうけ、歴史班の緊密な協力のもとに完ぺきな総合学術調査が展開できるよう配慮されたが、それぞれ各専門分野の第一人者を網羅しただけに各調査委員も「これ以上豪勢、強力なメンバーは望みえない」といつている<sup>22</sup>という。つまり、地質・地層および建造物を調査する科学班と、文献・絵画や石垣を調査する歴史班を設け、双方が緊密に協力することによって、総合的な学術調査が実施されるように配慮されており、そのような基本方針のうえに文献史学・考古学・建築学・建築史学・地質学の各分野における第一人者が集められたというのである。そのことは、表1に見られるように、上記各分野を専攻する、大学教授の職と博士学位を有する専門家が名を連ねている（表1のNo.1～6、11～13）ことから裏付けられるであろう。

次に、調査団メンバーの構成と主な構成員の履歴や、総合調査に至るまでの経緯などから窺える点をいくつか指摘しておきたい。

一つは、博士学位を有したり大学教授の職に就いたりしているわけではないが、大阪城の歴史や大阪の文化史に精通しているメンバーが調査団に加わっている点である。まず何よりも、当時天守閣の主任学芸員であった岡本良一が加わっていることを見落とすべきではない。また山根徳太郎は、「大阪城址研究会」「難波宮趾」研究会の主宰者である<sup>23</sup>と同時に、総合調査実施以前から難波宮の発掘調査に注力し、当時は石山本願寺の位置について独自の見解を提唱していたことで知られる考古学者である。さらに望月信成と川端直正は、総合調査の前年に先述の大阪祭が開催された際に、豊公入城行列の学術顧問団に参加している<sup>24</sup>。これらの点から、文献史学・考

表1、大坂城総合学術調査の関係者

No.	氏名（調査団発足時の年齢）	所属
1	村田治郎（63）	京都大学名誉教授／文化財専門審議会委員
2	末永雅雄（61）	関西大学教授／文化財専門審議会委員
3	坂本太郎（57）	東京大学史料編纂所所長／文化財専門審議会委員
4	魚澄惣五郎（69）	関西大学教授
5	藤 直幹（56）	大阪大学教授
6	桑田忠親（56）	国学院大学教授
7	山根徳太郎（70）	大阪市立大学講師
8	黒板昌夫（54）	文部技官／文化財調査官
9	齋藤 忠（52）	文部技官／文化財調査官
10	望月信成（59）	大阪市立美術館長／大阪市立大学教授
11	棚橋 諒（52）	京都大学教授
12	村山朔郎（47）	京都大学教授
13	浅野 清（54）	大阪市立大学教授
14	服部勝吉（62）	文化財保護委員会建造物課長
15	田治六郎	大阪市土木局公園課長
16	川端直正	大阪市史編纂委員
17	岡本良一（46）	大阪市経済局大阪城天守閣主任学芸員

注1) ◆は学術調査団メンバーの人選を行った大坂城調査委員会の委員。委員長は中井光次（大阪市長）に加わっている。

注2) 金明水井戸調査には秋山進午（大阪城天守閣学芸員）が、石垣刻印調査には村川行弘（大阪府立北野

注3) 『読売新聞』1959年3月15日9面の調査団メンバー紹介記事および渡辺武による講演「大坂城の歴史 大阪本社主催『徳川大坂城石垣シンポジウム「大坂城の謎」を解く』[2009年]」のパンフレットに挿

古学・建築学・建築史学・地質学の各分野における第一人者を集めると同時に、これらを大阪の歴史に詳しい専門家がサポートすることが期待されていたと言えよう。

次に注目しておきたいのは、調査団メンバーの人選に当たった大坂城調査委員の中の4人の学識者（村田・末永・坂本・魚澄）のうち、魚澄を除く3名が文化財専門審議会委員であるという点である。文化財専門審議会委員とは、文化財保護委員会の諮問機関として設置された組織である。坂本の回顧するところによれば、坂本は、1955年の文化財保護法施行当時から同審議会の史跡部会所属委員に任命されており、ここでは年1回の新史跡の指定を行うほか、史跡の現状変更が申請された際には随時招集されて対応を協議していたという<sup>25</sup>。また、村田も文化財保護法が制定された当時から同審議会の委員を務めていたという<sup>26</sup>。これらの点からして、村田と坂本は、大坂城と城内の古建造物が国の史跡や重要文化財に指定された際に、その指定に関わっていた可能性が高い。いずれにしろ、村田・末永・坂本の3人は、文化財の指定に関わる立場にいたのであり、これに加えて、文化財指定に関する調査に関わってきた黒板昌夫や斎藤忠が調査団に加わっていることをふまえるならば、大阪市と大読は、大坂城の文化財としての指定に強い関心を持ちながら調査団の人選をしたと言わざるを得ない。豊臣時代の遺構の発見などの成果が上がった際には、これら文化財専門審議会委員の肩書をもつ関係者が、大坂城の文化財としてのグレードアップへの理解者として動くことや、その保存について助言することを、大阪市と大読は期待していた可能性があるということ、仮説として提示しておきたい。

以上、本章で述べてきたことを小括するならば、以下のようになろう。大読は、未知の領域に

専門分野（学位）	役割分担
建築史（工学博士）	◆団長／科学班（科学班の総指揮）
考古学（文学博士）	◆副団長／歴史班（歴史班の総指揮、金明水井戸調査）
歴史学（文学博士）	◆顧問／歴史班
歴史学（文学博士）	◆顧問／歴史班
歴史学（文学博士）	歴史班（徳川時代初期の文献収集・調査）
歴史学（文学博士）	歴史班（豊臣時代の文献収集・調査）
考古学	歴史班（石山本願寺の文献収集・調査）
	歴史班（各城との比較）
考古学（文学博士）	歴史班
美術史	歴史班（古絵図・美術工芸品の収集・調査）
建築学（工学博士）	科学班（地盤調査）
地質学（工学博士）	科学班（地盤調査、金明水井戸調査）
建築学（工学博士）	科学班（地盤調査）
	科学班
	大阪市の協力者
	大阪市の協力者
	大阪市の協力者（歴史班の石垣刻印調査）

上記四名と中井の他に、神崎驥一（大阪市教育委員会委員長）、務台光雄（大阪読売新聞社代表取締役）も

高校教諭）が、それぞれ調査員として現場調査に参加している。と大坂城総合学術調査」のレジュメ（大阪市・大阪市教育委員会・芦屋市・芦屋市教育委員会・読売新聞入）を参照して作成した。

科学的観測が及ぶようになった世界的趨勢にあわせて、日本国内の前人未踏の領域に「科学のメスを入れる」というキャッチフレーズを掲げて学術調査団を組織し、部数拡大につなげると同時に、調査対象となった地域の観光開発への貢献を意図していた。そして、大阪進出戦略のイベントを主催する過程で、秀吉人気にも注目していたのである。一方、大阪市は、敗戦直後から大阪城の中央公園化を進め、城内の天守閣や濠・石垣・櫓などの歴史的建造物に観光資源としての役割を期待していたのである。そしてここに、濠の濁水という大阪城の歴史的景観を損なう問題が生じたのをきっかけに双方がタイアップして学術調査団を組織し、問題の原因を究明すると同時に、大阪城の歴史遺産としての価値を確認しようとする背景があったのである。

## II、総合調査の展開

### (1) 調査活動の概要とその成果

総合調査はどのように実施されたのか。調査活動の概要とその成果を概観しておこう<sup>27</sup>。

#### i 金明水井戸調査

天守台の入口にある井戸の発掘調査を行って、豊臣秀吉が井戸水を浄化するために大判・小判を沈めたとされる伝承が事実なのかどうかを解明することを目的とする調査である。なお、この伝承は、昭和初期の天守閣復興当時には「かなり正確な事実」<sup>28</sup>として伝えられており、調査開始前の時点でも、例えば末永が「井戸に貨幣をしずめる例は奈良時代以後たくさんあるから、金明水にもしずめてあることは十分考えられる」とコメントしたように、調査団の幹部も史実として特定される可能性が高いことを示唆していた<sup>29</sup>。

調査は、3月19日の水質調査を経て、3月28日より井戸を探索するかたちで始められた。まず深さを測定したうえで4日間にわたって井戸水を汲み出し、学芸員が底に降りて残存物を確認し、そこからさらに発掘調査が進められた。この発掘調査では、約2週間にわたって4.5m掘り下げ、井戸底と思われると思われる洪積層、つまり地下水層に到達した地点まで掘り下げたことで打ち切られた。結論から先に述べると、大判・小判等の黄金は発見されなかった。発掘調査で発見されたモノは、汲み出し完了直後の底で泳ぐ金魚2匹のほかには、明治維新以降のものと思われる堆積層の上層では機関銃・ピストル・貨幣、江戸時代のものと思われる中層では寛永通宝・釣瓶・兜、桃山時代のものと思われる最下層では瓦等であった。当初の予測や期待とは裏腹に、秀吉が井戸に黄金を沈めたというのは伝承に過ぎないことが明るみになったのである。

#### ii 石垣刻印調査

大阪城内全域にわたって全ての石垣の刻印、すなわち普請を担当した大名が刻んだ家紋などの記号を調べ、そこから現在の大阪城の土台そのものが豊臣時代のものなのか、徳川時代のものなのか、あるいは徳川時代のものではあったとしても豊臣時代の痕跡は残っているのか否かを解明しようとする調査である。その意味では、豊臣時代の遺構を確認するという総合調査の目的からして、極めて重要な意味を持つ調査であった。

まず、岡本良一による調査団発足前の予備調査では、刻印の分布から明らかになる諸大名の石垣築造工事の受け持ち区域が、徳川時代の石垣普請丁場割図と一致することが明らかにされてい

た。さらに3月23日から26日にかけて岡本が実施した調査と、4月23日から5月7日にかけて当時大阪府立北野高校教諭であった村川行弘が指導する関西学院大学の考古学研究会10人による調査を通じて、全ての石垣について写真撮影と記録作成および古記録との照合が行われた。さらに、岡本は大読の記者と共に小豆島の石切場を踏査するというかたちで、徹底かつ大がかりな調査が実施された。

その結果、調査開始当初期待されたような、例えば石田三成や福島正則のように関ヶ原の戦いや大坂の陣直後に改易された（再築に関わるはずのない）豊臣恩顧の大名の刻印は見つからず、逆に関ヶ原以後に大きく取り立てられた田中吉政の刻印が確認された。さらに、前述したように、刻印の分布から判明した諸大名の工事担当区域が、徳川時代の石垣普請丁場割図と一致することから、現在の大阪城の土台は徳川時代に築造されたものであり、豊臣時代の痕跡は確認できないことが確実視されることになった。

### iii 地盤調査－サウンディングとボーリング－

地盤調査は、西外濠濁水の原因究明と大坂城の築城過程の解明を目的とする調査である。特に大坂城の築城過程の解明については、付近一帯は地盤の強固な洪積層である上町大地と地盤の軟弱な沖積層との境界にあたる複雑な地帯であり、大坂城は天然要害の地に築かれていると理解されていた。つまり、秀吉は洪積層の硬い地山を選んで要害堅固に築いたとされていたのであるが、その真相を究明するのが地盤調査の目的なのである

まず3月31日からサウンディングが行われた。これは地盤探針とも呼ばれるもので、細い鉄棒（ロッド）に錘を載せて地中に振り込み、その際の貫入抵抗によって地盤の硬さを測るものである。地盤概況調査と重点調査箇所選出のために城内外の10地点で行われた。そのうち天守閣前の本丸広場では、地表下8mまで測定することができたが、それ以下はロッドの先端が石に当たって入らなくなった。このことから、大坂城は洪積層の硬い地山に直接建てられたのではなく、約10mの厚さの人工的な盛り土の上に建てられていること、すなわち大坂城は洪積層の硬い地山の上に要害堅固に築かれたという通説の見解は誤りであることが報告された。

次に、サウンディングの結果報告に基づいて天守閣前広場と西外濠で5月以降にボーリング調査が行われた。西外濠のボーリング調査では、サウンディングで推定された通り、濠底の地層には自然に堆積した状態の粘土層があり、俗に言われる「濠底総石張形式」すなわち濠の底にまで石垣が敷き詰められているのではないということがあらためて確認された。そして、天守閣前広場のボーリングでは豊臣時代の遺構発見につながる成果があがった。つまりサウンディングで推定されたことを裏付ける調査結果が得られたのである。地下9mまではボーリングの打ち込みが容易で、この地盤は柔らかい盛土であることが確認された。さらに9mを過ぎた地点で約3mにわたる高さで三段に積み上げられた石垣らしきものに突き当たり、それらを採用した標本管の中に花崗岩が確認された。そして、この三段にわたる花崗岩が豊臣時代の大阪城の石垣である可能性が指摘され、一定の準備期間を経たのちに発掘調査を行うことになったのである。

### iv 発掘調査

ボーリング調査によって、天守閣前本丸広場の地下には石垣らしきものが存在することが確認

されたので、その実態を確かめるべく 12 月 7 日から発掘調査が開始された（作業を請け負ったのは大林組）。ボーリング調査から発掘調査開始まで半年近くかかっているが、それは文化財保護委員会の許可を得るのに相当の日数を要したこと、ボーリング調査が終了したのは 5 月末で、この時期から秋にかけては観光シーズンでもあるので、そのような時期に天守閣前で大がかりな発掘調査を実施するのは困難であると判断されたことによる。調査は、石垣らしきものの存在が確認されたボーリング地点を囲む直径 3 ㍍の堅穴を設定し、それを手掘りで約 10 ㍍の深さにわたって掘り下げるといふ大がかりなものであった。そして発掘開始から 14 日目にあたる 12 月 20 日に、地表下約 7.5 ㍍のところで、推定された通りの石垣が発見された。その地下石垣は、自然のままに近い花崗岩と斑瀧岩を積み、その間を割栗石でつめた野面積みの石垣であった。

このように、ボーリング調査の結果として推定されたことは正しかったことが証明されたのであるが、この時点で地下石垣が豊臣時代のものであると確認されたわけではなく、その裏付けは今後の課題とされた。そして調査団は、地下石垣発見直後の 12 月 27 日に総会を開催し（出席者は村田・末永・坂本・浅野・桑田・山根・黒板・村山）、①地下石垣の完全保存、②石垣の規模を確かめるための調査、③第二第三の地点での発掘調査を通じて石垣を復元し完ぺきな資料とする、といった三項目を内容とする要望書を大阪市に提出することとなった<sup>80</sup>。

## （2）メディア・イベントとしての総合調査

以上、ここまで見てきたような総合的かつ科学的な調査を通じて、豊臣時代の遺構の発見という当初の目的とは裏腹に、現存大阪城は徳川製であることが確認されることとなった。そして、当初の目的にかなう成果として地下石垣が発見されたのであるが、これが豊臣時代のものであると即座に確定したわけではなかったのである。このことを確認したうえで、本節では総合調査のメディア・イベントとしての側面にアプローチしたい。その際に、総合調査は大読と大阪市によって主催されていたがゆえに、大読の独占報道というかたちで発信されたことに注目したい。このことは、学術研究の成果を市民に還元する際に、どのような影響をもたらすであろうか。

表 2 をご覧いただきたい。これは、総合調査に関する大読の報道記事をリストアップして、その見出しの一部と字数・段数等を示すことによって、個々の記事がどのように報じられているのかを示したものである。一見すれば、3 月 13 日の総合調査実施を伝える社告掲載以来、4 月半ばに至るまではほぼ毎日のように調査の進捗状況を報じていることがわかる。特にこの期間は、金明水井戸調査の報道に注力していることが目につく（No.11・12・14・15・19・22～25・27～31）が、この点については後述することにして、まずは前節 i～iv の各調査が一段落つくだびに掲載された解説記事（No.2・13・34・39・47・48・55）を取り上げることにしたい。これらの解説記事は、大坂城の歴史を解説したり、各種調査の結果や中間総括をレポートしたりするために掲載されたものである。紙幅の関係上、これらの一つ一つを直接引用することは避けるが、いずれも平易な文章で図版や写真を豊富に取り揃えるかたちで、総合調査の成果をわかりやすく伝えている。しかも、その掲載紙面の最上段から半分かそれ以上のスペースを占めるトップ記事として掲載されている。また、総合調査の実施を社告で知らせた 3 月 13 日の夕刊から、合計 11 回の連載記事「大坂城とこの人」が掲載されている。これは、天守閣の設計に関わった元

大阪市建築課長の波江悌夫をはじめ、戦前以来天守閣再建や石垣刻印の研究調査などに関わった人びとの事績や回想を紹介するもので、大阪城と総合調査への関心を高めるための紙上キャンペーンというべき企画であろう<sup>81</sup>。以上のような良質な内容の解説記事が、新聞というマスメディアによって、しかもトップ記事としての掲載や紙上キャンペーンなどの新聞ならではの演出を通じて発信された場合、調査報告書として刊行された場合よりもはるかに多くの読者の目にふれることは明白であり、その意味では、学術調査の成果を市民に還元するうえで、大読は重要な役割を果たしていると言えよう。

しかし、I章で述べたように、総合調査を主催することが大読にとって大阪進出戦略の一環でもあったことを想起した場合、その報道姿勢には新聞社としての営業戦略がバイアスとして影響していることも否めない。例えば、一週間の重要ニュースをまとめた週間レポート欄でも総合調査は取り上げられている(No.6)が、その記事の中では、大阪城について「巨石と黄金で飾られたこの城」と記し、さらに「濠に青々とたたえられた水の水原、築城の秘密、秀吉が黄金を沈め、つきることのないという金明水井戸のナゾなど。濃い霧の中に包まれていた浪花の誇りはここにはじめて科学のメスによりそのベールをぬぐ」と記すことによって、豊臣時代の遺構が黄金の発見を伴うかたちで見つかることを期待させる書き方をしている。大読にとって金明水井戸調査は、未知の領域への探検という性格が濃厚であると同時に、黄金の発見という特ダネにつながる可能性が高いものであったのであろう。そこに、社告から約1カ月にわたって、大読が金明水井戸調査の進捗状況を毎日のように報じた理由があると、筆者は考える。

ところが、金明水井戸調査の結果は先述の通りである。加えて石垣刻印調査では豊臣時代の遺構の発見という当初の目的とは真逆の結果が報告され、地盤調査では重大な発見がなされたものの、それが豊臣時代の遺構であることが立証されたわけではなかった。その結果、金明水井戸調査が打ち切られたのを一つの区切りとして、大読の総合調査の報道にける姿勢は慎重姿勢に転じたものと推察される。そのことは、表2を見る限り、金明水井戸調査が一段落ついた4月半ばまでとそれ以降とでは記事が掲載される頻度が異なること、言い換えれば、地盤調査と発掘調査については進捗状況をつぶさに報道することはなくなっていることから裏付けられるであろう。

さらに大読は、発掘調査の準備期間中である1959年10月に、自らが主催する大阪祭の一環として、心齋橋そごう百貨店で「大坂城学術調査展」を開催した。その趣旨は、総合調査の成果として地下石垣が発見されたことにふれつつ、「結論はなお今後の調査をまたなければなりません、これまで明らかにされた貴重な資料・報告をとりまとめて一般に公開します」(No.49)というものである。しかしながら、社告・記事共にその誌面での扱いは、字数・段数などに顕著に表れているように、総合調査が始まった当初に比べて小さい。そして、その展覧会の様子を伝える記事は、「こんどの調査で出土した桃山風瓦、各種つるべ、滑車、金のキセルなど往時を示すかずかずの品」と、金明水井戸調査で発掘されたモノが並べられて多数の観客がつかめたことを伝えるにとどまっており(No.50)、石垣刻印調査の成果には言及していない。その意味では、金明水井戸調査終了後の大読の慎重な姿勢は、現存大阪城が徳川製であることを認めることへの慎重姿勢でもあるように思われる。

表2、総合調査を報じた読売新聞の記事（1959年3月～1960年1月）

No.	月日	紙面	段	字数（概算）	記事のタイトル
1	313	1	5	1128	大坂城初の総合学術調査皇太子ご成婚と大阪市制70周年記念70
2	"	8	8	5371	大坂城いとむかし
3	"	9	8	1380	干上る大坂城の濠“泥土の底”見せる石垣崩壊の危険も
4	"	"	3	1317	大坂城総合学術調査期待の声大阪の街に“科学”与える
5	"	"	6	1470	大坂城のナゾ“第二の石垣現る”水原は地下水か川水か
6	315	8	2	280	大坂城に科学のメス大坂城の総合学術調査
7	"	9	6	1520	大坂城学術調査団メンバー14氏きまる団長に村田博士科学・歴史
8	316	9	6	1140	大坂城学術調査団スタートざらり“最高の頭脳”きょう実行計画
9	"	"	5	1515	調査団の抱負結果を集大成、後代に一般からの資料提供まつ
10	316e	5	3	600	修理の石垣や外濠など視察
11	317	9	6	1665	大坂城学術調査まず「金明水」から調査計画きまる数地点をポー
12	318	9	4	1522	“沈めた黄金”に挑む大坂城学術調査「金明水」のナゾ解明
13	320	10	2	1304	大坂城学術調査いまの石垣は“徳川製”？岡本良一「百種にのぼ
14	"	11	5	1155	金明水、初めてくむ井戸の水深4メートルと判る大坂城の学術調
15	321	9	4	690	“黄金の水”は川水？大坂城学術調査さらに銀明水も探る
16	322	9	3	450	内外の濠に水位測定標水原のナゾ解く大坂城の学術調査
17	323	9	4	765	きょうから大坂城の石垣調査築城のナゾ解く諸大名の家紋くつつが
18	323e	5	3	405	まず北内濠から大坂城石垣の刻印調査
19	324	9	4	1064	金明水細菌で飲めぬ九地点選び水質検査大坂城の学術調査／約20
20	326	9	3	780	大坂城石垣調査進む学生兄弟も参加新しい刻印など発見
21	327	9	4	686	鉄塊でつないだ大坂城の巨石石垣調査で判る
22	328	9	2	330	きょうから「金明水」大坂城の学術調査すすむ
23	329	9	8	1320	「金明水井戸」におりる大坂城学術調査直径2.2メートルの水面
24	330	9	1	360	カラになる「金明水」大坂城の学術調査きょう午後、井戸底を
25	331	11	5	1110	キンギョ二尾が健在底を現わした「金明水」井戸
26	"	"	6	764	大坂城学術調査地山か盛土かにメスキょうから10地点で地盤調査
27	402	9	3	495	ピストルや機関銃大坂城「金明水」井戸の発掘時代の移り変り示
28	404	9	3	899	「金明水」が解く大坂城史“幕末”のカブトツルべが出る学術調
29	405	11	2	420	ピカリ金のキセル「金明水」井戸から発掘
30	407	9	3	495	昔をしのばせるツルべ大坂城学術調査「金明水」井戸で発掘
31	408	9	3	870	太閤のカワラ大坂城の学術調査「金明水」の発掘すすむ
32	412	11	6	1841	大坂城調査こぼれ話“忍びの術”？で石垣をのぼる府警機動隊員
33	412e	3	2	374	大坂城総合学術調査記念大坂城写真コンクール作品募集
34	413e	2	6	3224	大坂城の石垣学術調査中間発表
35	415e	5	3	900	時代鑑定の資料整う大坂城学術調査「金明水」井戸の発掘打切り
36	416e	5	1	300	濠底のナゾに挑む大坂城調査大棧橋でできる
37	417	9	2	375	大坂城の断面図学術調査
38	419	11	5	615	盛土に築城か大坂城調査地盤探針を強化
39	430	10	6	4021	歴史を物語る「金明水」井戸大坂城学術調査
40	502e	5	4	960	“人工の丘”に立つボーリング調査始まる定説覆すか大坂城の地
41	503e	3	7	1080	解ける石垣の秘密大坂城学術調査びったり古書通り街の資料提供
42	509	9	5	540	「総石張り」は伝説大坂城内濠の底調査団が結論
43	510e	3	5	982	「芦屋の石」も発見大坂城の石垣刻印調査終る
44	"	"	3	315	濠底ボーリング調査始まる
45	519	11	8	1500	“第二の城”掘りあてる大坂城の学術調査太閤が築いた城か地下
46	522e	5	3	370	“地下の城”をさぐる大坂城調査第2号ボーリング始む
47	524e	2	7	4360	大坂城を築いた“石の故郷”小豆島
48	614e	2	7	4535	大坂城の地下を掘って学術調査の中間報告
49	1011e	3	2	528	大阪祭参加大坂城学術調査展第二の大坂城をさぐる
50	1013e	5	1	300	「大坂城学術調査展」開く
51	1207	9	2	1131	“眠る石垣”を本格発掘今日から築城のキメ手さがし太閤さんか
52	1215	11	2	510	“人工の丘”を確認大坂城の本丸発掘宋銭や陶器出る
53	1221	9	6	1389	姿を現した“眠る石垣”大坂城の歴史解くカギ炎上物語る焼土層
54	1228	9	3	495	“第二の石垣”を保存大坂城調査団、市に申し入れ
55	104	6	6	4556	地下の大坂城三百年の秘密を解く発掘調査総合科学の勝利考古学

注1) 月日の「e」はタ刊。記事の字数は本文掲載欄（見出しは含めない）に何文字分のマス目が用意されているか

(見出し)	写真	図版	備考
年のナゾを解明	あり		社告
	あり		トップ記事／解説
	あり		右肩トップ記事
	あり		
			週間レポート
の権威集める	あり		
打合せ	あり		
リング	あり		
	あり		
	あり		
る刻印」予備調査結果「元和」の再築記録と一致	あり	あり	トップ記事／解説
査	あり		
えるか総改築説	あり		
	あり		
種の刻印採集歴史班	あり		
	あり		
	あり		
井戸石からも刻印発見…	あり		
発掘	あり		
		あり	
す遺物	あり		
査	あり		
	あり		
	あり		
	あり		
が加勢	あり		
			社告
	あり		トップ記事／解説
	あり		
		あり	
	あり	あり	トップ記事／解説
盤	あり		
に張り切る			
	あり		
10 編にナゾの石垣	あり	あり	右肩トップ記事
	あり		
	あり	あり	トップ記事／解説
	あり	あり	トップ記事／解説
			社告
(大坂城) 徳川氏が	あり		
	あり		
地下 8 編、金粉も掘り出す	あり	あり	右肩トップ記事
だけでは判らぬ	あり	あり	トップ記事／解説

を算出したものである。

確かに、伝承を受け売りしてしまうような先走った報道が慎重姿勢に転じることは、学術研究成果の市民への還元という観点からして歓迎すべきことではある。しかし、その報道が独占報道であった場合、そこには看過してはならないもう一つの偏りがある。それは、学術調査の成果を偏頗なく報じたとしても、それが特定新聞社の独占報道である以上、他紙の読者にはその成果が伝わらないということである<sup>32</sup>。このように、特定新聞社の独占報道によって学術調査が報道される場合、その報じられ方には新聞社の営業戦略が報道の内容を左右したり、他紙の読者には伝わらなかつたりするという問題点が存在するのである。

### Ⅲ、総合調査はいかに語られたのか —岡本良一の場合—

ここまで見てきたように、学術研究調査の成果を市民に還元する際に、調査団が新聞というマスメディアと提携すると、そこには発信力の強化という利点があるが、それが特定新聞社による独占報道になった場合、そこには様々な偏りが生ずることが、明らかになった。ただし、ここで指摘しておきたいことは、総合調査当時の段階でその成果を市民に還元する役割を果たしたのは大読だけではないということである。総合調査が実施された当時から、その成果と課題を大読に依拠することなく発信し続けた関係者がいた。それが、大阪城天守閣の主任学芸員として石垣刻印調査の現場で主導的役割を果たした岡本良一（1913～1988）である。そこで本章では、岡本によって総合調査の成果と課題がどのように語られたのかを考察することにしたい。

まず、岡本良一のプロフィールと、戦後の天守閣の歩みの中で岡本がどのような役割を果たしたのかを概観しておこう<sup>33</sup>。岡本は、1913（大正2）年に大阪市で生まれ、1938（昭和13）年に京都帝国大学文学部史学科国史専攻を卒業した後に、ある高等女学校教諭の職を経て1942年に大阪市役所に就職し、天守閣の学芸員となった。岡本が天守閣に就職した当時の大阪城が、陸軍と進駐軍によって占拠されていたことは既に述べたが、この間の天守閣は、戦災による焼失を免れたにもかかわらず、その内部は陸軍と進駐軍のずさんな利用のために荒廃が進んでいた。岡本の回想によれば、進駐軍撤収直後の天守閣の内部は「窓という窓はガラスが全て壊された上、五十台ほどあった陳列ケースの鋼鉄製の枠が、どれもこれも無惨にひんまげられてスクラップ同然」になっており、「これ以上の荒らしようもない」状態であったという<sup>34</sup>。しかも戦前以来館蔵資料がほとんどないという状況であった。そのような状況の中で、天守閣は1949年7月20日より7年ぶりの一般公開を再開したのであるが、予想以上の入場者と収益を得たことによって、相当額の予算が計上されるようになり、そうして獲得した予算で大坂夏の陣図屏風などの現在の館蔵資料の中の目玉展示品を続々と購入することができるようになっていた<sup>35</sup>。

また当時の天守閣は、大阪市経済局貿易観光課観光係が管轄する一事業所として位置づけられており、大阪市当局からは観光施設として扱われていた。しかし、このような扱いに対して、天守閣は単なる観光施設ではなく、歴史博物館であることを対外的に知らしめようとする気運も強まっていた。その方向性は、天守閣の運営委員に着任した大学教授の協力を得ながら、展示公開とそのための史料収集と調査研究を主たる業務とする歴史博物館として天守閣を機能させようとするもので、その中心テーマは豊臣秀吉とその時代を中心とする大阪の郷土史、および城郭と武

器・武具などであることを明確にしようとするものであり、そのような方向性を明確にするうえで主要な役割を果たしたのが岡本良一であった<sup>36</sup>。その意味では、戦時中に荒廃が進んだ天守閣の復旧と整備、さらに歴史博物館としての機能の充実に岡本は尽力してきたと言えるであろう。

それでは、総合調査の成果と課題について、岡本は市民に向けてどのように還元していたのであろうか。まず注目されるのは、石垣刻印調査が本格的に開始される前の1959年3月下旬の段階で、自身が行った予備調査では刻印から判明する諸大名の受け持ち区域が普請丁場割図とほぼ完全に一致することを理由に、「ほんの予備調査にはすぎないが、その限りで残念ながら太閤さん時代のものと判定できる石垣はどこにも発見できない。」<sup>37</sup>と、冷静に見通しを語っている点である。当時は調査団が発足したばかりで、大読も豊臣時代の遺構が発見されることに期待感を持たせるような報道をしていたことを想起すれば、そのような大読の姿勢とは距離を置いた語り方をしていると言えよう。しかし、このことは豊臣時代の遺構を確認するという総合調査の目的に対して、岡本が否定的に見ていたことを意味するのではない。それでは、岡本は総合調査の目的をどのように理解し、その成果と課題を市民にどう伝えようとしていたのか。

そこでまず取り上げたいのが、1959年9月22日に開催された、清交会の定例午餐会における講演である。清交会は大正末期に発足した大阪経済界をリードする実業家や会社経営者の社交クラブである。そこで岡本は、「二つの大坂城」という演題で講演をしている<sup>38</sup>。そこでの岡本の語りは以下のようなものである。

まず導入として、「大坂城といえますとどなたでもそうなんですが、豊臣秀吉ということをお考えになるわけでした、実際お城へおいでになって、あの大きな石垣とか、濠とか、それからその石垣に据えられておるとんでもない大きな石をご覧になりますと、すぐに太閤さんが頭に浮かぶわけです」<sup>39</sup>と述べ、「大坂城といえば豊臣秀吉」という固定観念が広く共有されていることを前提に参会者に語りかける。しかしながら、講談や小説や子ども時代に学校で教わったことを思い出せば、大坂城が二度にわたる大坂の陣で落城したのは周知のことだから、現存大坂城が豊臣時代の姿をそのまま残しているのはあり得ないことであり、徳川幕府の手が入っていることは納得がいくはずであると述べ、以下のように総合調査の目的を語る。

しかし、その徳川になってからの再築といえますか、修繕といえますか、それが果たしてどの程度であったか、ということが問題じゃないかと思うのです。私たちが今度の調査をします時には、やはり太閤さん時代そのままの大坂城が現在に残っているということは、勿論考えていなかったわけでした、ただ太閤さんの大坂城というものがどの程度に残っているのか、これがかみかたかったのであります。そうしてできれば太閤さん時代の大坂城というのが、新発見の資料を総合して完全に復元できはしないか、復元したい、こういうような気持ちでかかったわけなのです<sup>40</sup>。

見られるように、「大坂城といえば豊臣秀吉」という固定観念が広く共有されていることを前提に、徳川による再築も史実として受け入れるように働きかけたうえで、そうであるからこそ、徳川による再築はどの程度のものであったのかを明らかにし、その成果にもとづいて豊臣時代の遺構を復元しようとするのが総合調査の目的であると語る。

そして、具体的な調査の内容については、石垣刻印調査と地盤調査（サウンディングとボーリング）の成果に話題を絞って解説し、地表の石垣には豊臣時代の痕跡は確認できないが、地下に豊臣時代の石垣が埋もれている可能性があるとしたうえで、「そうしますと徳川氏が大坂城を修繕する際に、かつての秀吉時代の大坂城というものを、本当に文字通り地下へ埋めてしまって、そして全然別個に徳川氏の大坂城というものを造ったのではなからうか。こういうことが現在の段階で考えられるわけなのです」<sup>41</sup>と結論付ける。そして、このような推定が可能であることの論拠として、当時の徳川氏にしてみれば、その権力を誇示するためにも豊臣時代のものを凌駕するような大坂城を再築する必要があり、秀吉が大坂城を築城した当時と比べて徳川氏の権力は飛躍的に強化しているから諸大名を動員して再築工事に従事させることは不可能ではないと説明し、さらに続けて今後予定されている発掘調査への抱負を以下のように述べる。

むこう〔大阪城天守閣／能川〕におります私がこういうふうには、今の大阪城は豊臣秀吉じゃなしに徳川が造ったんだ。こういうことを申上げるのは非常に具合が悪いので、それだけでもお客さんが大分減るんじゃないか、というような心配をするのですけれど、しかし心配は心配としまして、やはりそういう調査を通じて、今までわかっておらなかった秀吉時代の大坂城というものを、とにかくつかんで行きたい。いま調査作業は一時中断中ですが近くまた、いま申しましたこのボーリングの箇所、ここを中心にしまして石垣がどういふ石垣かはっきりさせるために、ここ一〇メートルばかりのところを掘り下げようという計画をもっています。…（中略）…そういうことを通じまして、秀吉時代の大坂城の姿がだんだんと明らかにされてくるという期待を私たちはもっているわけなのです<sup>42</sup>。

今の大阪城は徳川が造ったというのは集客効果に悪影響をもたらすかもしれないが、今後予定されている発掘調査で豊臣時代の大坂城の姿がかなりの程度明らかになるはずであるとして、参会者の関心をつなぎとめようとしていることがわかる。ちなみに、総合調査終了直後の1960年に、岡本は日本城郭協会の機関誌『城郭』に「地下に眠る豊臣氏大阪城の石垣」というタイトルで寄稿し、総合調査の成果と課題について語っているが、その論旨は、「大坂城といえば豊臣秀吉」という固定観念の存在を前提に、徳川氏によって大坂城が再築されている事実注意到注意を促しながら総合調査の目的を伝え、さらに著しい成果をあげたものとして石垣刻印調査と地盤調査と発掘調査をあげ、地下石垣が豊臣時代のものであるという仮説が成り立つ論拠を説明するというもので、ここまで見てきた清交会での講演と同じである<sup>43</sup>。

それでは、以上の二つの事例を確認したうえで、注目すべき点を二つ挙げておこう。

まず注目すべきことは、どのような人びとに向けて、どのようなタイミングで語っているのかという点である。その際に、清交会と日本城郭研究会は当時の市民の中でも、総合調査に対して特に強い関心をもっていることが窺えることを確認しておきたい。このうち日本城郭協会は、大学教員とアマチュア研究者とを合わせた全国の城郭研究者たちの組織であるから、この点についての多言は無用であろう。もう一方の清交会は、先述したように、大正末期に発足した大阪の経済界をリードする実業家や会社経営者の社交クラブであるが、その清交会が定例午餐講演会の講師に岡本を選んだこと自体に、当時の大阪財界の総合調査に対する強い関心が表れていると解す

べきであろう。そして、さらに注意すべきことは、総合調査の結果として現在の大阪城が完全に徳川再建時のものであることが新聞に報じられたときに、熱烈な“太閤さんのお城ファン”から猛烈な抗議や反論が舞い込んできたという点である<sup>44</sup>。清交会や日本城郭協会がその当事者であると断定しているのではない。総合調査の現場を主導していた以上、岡本にはそのような市民の反応が伝わっていたと思われる。そうであるからこそ、特に強い関心をもつことが想定される人びとを対象として、その歴史認識に丁寧働きかけながら総合調査の目的を伝えようとしていることに注意を喚起したいのである。しかも、その講演実施と論稿掲載は発掘調査の準備期間と総合調査終了直後の時期であり、大読の報道を頼ることができない時期でもある。これらのことから、岡本は、マスメディアの力に依拠することなく、まず大阪財界のリーダーと城郭研究者の歴史認識に働きかけながら、その関心をつなぎとめようとしていたことが窺えるのである。

次に注目すべきことは、以下の引用に見られるように、発掘調査の成果としての地下石垣の発見に関心が集まるように話を進めながらも、それが豊臣時代のものであると明言することを回避している点である。

こんなに説明されると、豊臣製大阪城の地下埋没説もまんざら理屈の通らないものでもない。しかしこのような説明だけでは、いくらもっともらしくても、絶対的なキメ手とはなし難い。発掘において、これといった伴出物のなかったことも時代決定を躊躇させる。とにかく現状ではまだまだ速断はさけねばならない。

私達はさらに第三次、第四次と調査を続行して、その結果を慎重に検討しなければならない。この調査の結果如何は、たんに大阪城史にとって重大な関係があるばかりでなく、わが国の中世末から近世初頭にかけての政治史経済史の研究に影響する所甚大なものがあるであろう<sup>45</sup>。(下線能川)

上は、日本城郭協会への寄稿の末尾の箇所を引用したものである。冒頭の「こんなに説明されると」というのは、この引用の直前にある、地下石垣が豊臣時代の大阪城であることを推定しうる論拠のことを指しており、その内容は先述の清交会に対する説明と同じである。注目すべきは、論拠を説明しておきながら、仮説が成り立つ論拠を説明するだけでは「絶対的なキメ手とはなし難い」と明言し、速断を避けながら継続的に調査に取り組むことが肝要であると述べている点である。それでは、さらに必要であると考えた調査とは何なのか。引用の下線部にある「第三次、第四次」は、この引用の前の箇所で総合調査の石垣刻印調査を第一次調査、発掘調査を第二次調査としたことを受けての表現である。そうなると、岡本は総合調査の再開を提言しているとも受け取れるが、まずは以後の発言にも注目してみよう。

手がかりは、総合調査から約 10 年後に岡本が書き上げた著作『大坂城』の中にある。同書について注目されるのは、同書の叙述が地下石垣の発見で始まり地下石垣の発見でしめくくられることである。つまり、序章で地下石垣の発見はこれまであやふやな点をはらんでいた大阪城の築城過程の再検討を迫るほどの重要な発見であると述べることから本論の叙述が始まり、終章で地下石垣の発見をめぐる今後の課題に言及することで叙述がしめくくられているのである。それでは、同書では何が今後の課題とされているのか。

この地下石垣の発見から間もないころ、もと徳川幕府の京都大工頭であった中井家から、「豊臣時代大坂城本丸図」という絵図が発見された。…（中略）…建築史を専攻する宮上茂隆氏は、さきの地下石垣を足がかりとして、この本丸図を精細に研究し、この図が豊臣時代の大坂城本丸図に間違いないと断定するなど、注目すべき論文（「豊臣秀吉築造大坂城の復原的研究」『建築史研究』三七号）を発表しているが、まだその断定を裏付ける具体的なデータは乏しく、この図の信憑性については、まだ結論を下しうる段階にいたっていない。

ともかく、せつかく秀吉築造のものとして、まずは間違いのない石垣が発見されているのであるから、ぜひともこれを足がかりにして大々的な発掘調査を行わなければならない。幻の城ともいべき秀吉創建の大坂城は、そのときあらためて現実のものとして、私たちの眼前にその姿をあらわすことになるであろう<sup>46</sup>。（半括弧原文）

上は、『大坂城』の終章をしめくくる箇所を引用したものである。見られるように、総合調査の翌年に中井家伝来の絵図が発見され、それをめぐる建築史研究者の考証が積み重ねられ、地下石垣が豊臣時代の大坂城のものであることが事実視されても、そこで得心することなく、絵図から推察されることを裏付ける発掘調査が必要であると、岡本は述べている。ちなみに、同書の刊行から10数年が経過した1984年7月2日付の産経新聞紙上でも、岡本は、中井家絵図についての研究が前進してその信憑性が高まったことと、その裏付けのために大阪城内でボーリング調査が始まったことを肯定的に評価しつつも、「ボーリング調査はなお引きつづき必要であるが、現段階でも最も要請されるのは考古学的な発掘調査である」と述べ、やはり発掘調査の必要性を指摘している<sup>47</sup>。この当時は、中井家絵図に記された石垣の位置情報から現在の本丸のどこに豊臣時代の石垣があるのかを推定しながらボーリング調査でその存在を確認する作業が進められており、その結果、10数か所で石垣の存在が確認されて、中井家絵図の信憑性は揺るがぬものになっていた。しかし、それでも岡本は発掘調査の必要性を指摘しているのである。

そして、岡本の産経新聞紙上での提言直後の1984年10月から翌85年4月にかけて、大阪城本丸で総合調査以来25年ぶりの発掘調査が行われ、その結果、大規模な石垣の遺構が発見され、地下石垣もあわせてこれらの遺構が豊臣時代の大坂城の石垣であることが確認された。ここまでの経緯をふまえるならば、岡本は、総合調査以降の大坂城研究を主導し、また後進による調査研究を見守り続けながら、総合調査の最大の成果である地下石垣が豊臣の城であることを明確にするためにも、文献史学と考古学と地質学の手法を兼ね備えた総合的学術調査の必要性を提言し続け、中でも考古学的発掘調査が何より必要とされていることを提言してきたのであると言えよう。

## おわりに ー総括と展望ー

本稿をしめくくるにあたって、まず、ここまで述べてきたことを総括しておこう。

総合調査は、これまでの大坂城研究が明らかにしてきたように、現存大阪城が徳川幕府によって再築されたものであり、豊臣の城は地下深くに眠り続けていることを解明した、画期的な学術調査であった。しかし、総合調査を当該期の歴史的文脈に位置づけるには、それが実施される背景として、主催者である大阪市と大読のそれぞれの動向をふまえる必要がある。大阪市は、敗戦

直後から大阪城の中央公園化を進め、城内の濠・石垣・櫓などの建造物に豊臣秀吉が遺した歴史遺産としての価値、すなわち観光資源としての集客効果を期待していた。そして大読は、未知の領域に「科学のメス」で挑む学術調査団を組織することによって、注目を集めると同時に対象地域の観光開発への貢献も企図しており、さらに大阪進出戦略として秀吉人気にあやかったメディア・イベントを主催することの有効性を察知していた。このように、観光開発推進という方向性を共有していた大阪市と大読の双方が提携することによって実現した、メディア・イベントとしての側面が総合調査にはあった。ゆえに、総合調査の成果は大読が独占的に報じることとなり、総合調査の発信のされ方は大読の営業戦略の影響を受けることとなったのである。

以上のような指摘は、総合調査に対する評価を貶めるために行っているのではない。特定新聞社の独占報道というかたちで発信されたからこそ、新聞報道とは一定の距離を保ちながら自らの言葉で総合調査の目的と意義を発信し続けた岡本良一の取り組みは、歴史学の研究成果は市民にどう還元されるべきなのかを考える貴重な事例であり、当該期における歴史学と社会との関係を考える貴重な手がかりであることを、総合調査の意義として強調したいのである。

それでは、以上のような総合調査のメディア・イベントとしての側面や、その成果の発信と共有のされ方について本稿で述べてきたことは、大坂城研究以外の関連する研究分野にどのような知見をもたらすであろうか。

第一にあげるべきは都市史研究である。本稿では、日本が戦後復興から高度経済成長へと向かう1960年前後の時期が、観光事業の推進による都市振興が目指される時期でもあり、戦争で被災した歴史遺産を修復・整備することによって観光資源として活用しようとする動きが顕著になる時代でもあることを浮き彫りにすることができたと考える。ここ最近の都市史研究では、近年の成果を整理して向かうべき課題を展望する取り組みが蓄積されつつある<sup>48</sup>。しかしそれらの中には、戦後の都市史、特に戦後復興や高度経済成長期の都市史研究に関して何が論点となるのかを明示したものは確認できない<sup>49</sup>。このことをふまえるならば、本稿は戦後の都市史には観光事業の推進および歴史遺産の発掘・保存・活用という重要問題領域があるということと、その考察に際しては行政とメディアと学識者および市民との関係を考えることが必要であることを、ささやかながら提起することにつながったのではないかと考える。

次にあげるべきは歴史学と社会との関係についてである。本稿では岡本良一の講演・著述等を通じた市民への働きかけに注目し、文献・絵画といった史料の調査だけではなく、地質学的調査や発掘調査に継続的に取り組むことの重要性を説いていたことを明らかにした。その意義づけを明確にするために、さらに注目したいのは、岡本がその著作『大坂城』の中で、陸軍と進駐軍による占領状態から解放された大阪城を「市民の城」と表現している点である<sup>50</sup>。

この点について渡辺武が筆者に語ったことを要約すると、以下ようになる。岡本自身も大阪市の出身ということもあって大阪に対する強い愛着を抱いていたことからして、天守閣のことを市民の寄付金で作った「市民の城」と見ていたのではないか。渡辺が天守閣で勤務していた当時は、自分自身や自分の父親が天守閣再建のときに寄付をしたという来館者が少なからずいて、「今の天守閣は豊臣のものでも徳川のものでもなく、市民が作った市民城だ」という感慨をよく

聞かされた。岡本もそんな思いを共有していたのではないか。それが戦後になって再び市民のもとに返されたときに、全国と世界中から観光客が見学にやってくる、まさに開かれた「市民の城」として機能させたいと考えていたのではないか<sup>51</sup>。

筆者は渡辺の見解を基本的に支持する。そのうえで、以下のような知見も付け加えたい。それは、大阪城が「市民の城」になるとはどういうことなのかということも岡本は示唆していたのではないか、ということである。総合調査の成果と課題について、長期にわたって語り続けた姿からは、大阪城が「市民の城」になるということは、単に市民が自由に入出入りできることを意味するのではなく、その歴史遺産としての価値を、市民が十分に理解していることであるということが示唆されているように思えてならない。そして、その歴史遺産としての価値は、メディアの営業戦略や根拠なき伝承ではなく、総合的かつ科学的な学術調査によって裏付けられたものでなければならないと考えていたのではなかろうか。

以上のように岡本の取り組みの意義を理解したとき、それはかつて遠山茂樹がマルクス主義歴史学の立場から跡づけてみせた、戦後の歴史学と歴史教育および歴史意識との関係<sup>52</sup>について、郷土史の研究・教育と観光開発という視角を導入しながら分析することの重要性を浮き彫りにしているように思われる。しかしながら、紙幅も尽きた。この点に関しては、岡本の取り組みは戦後の歴史学と社会との関係を考える上でも重要な事例であることを指摘するにとどめることで、擱筆することにしたい。

## 註

- 1 大阪城の漢字表記については、原則として明治維新までは「大坂城」を、以後は「大阪城」を用いている。ただし、総合調査とその調査団・委員会の名称については、当時の文化財保護委員会（現在の文化庁）の用字をふまえ、「大坂城」を用いることにした。
- 2 大阪城天守閣編『大阪城の謎 [図録]』（1969年）、岡本良一『大坂城』（岩波書店 [新書]、1970年）。
- 3 村川行弘『大坂城の謎』（学生社、1970年、2002年に改訂新版）。
- 4 渡辺武『図説 再見大阪城』（大阪都市協会、1983年、1990年に再版増補）。
- 5 村山朔郎「大坂城の地盤調査と地下石垣の発見」（『大阪城天守閣紀要』12号、1984年）。
- 6 大阪城天守閣編『大阪城はこの姿 [図録]』（2013年）、中村博司『大坂城全史』（筑摩書房 [新書]、2018年）。
- 7 津金澤聰廣編著『戦後日本のメディア・イベント』（世界思想社、2002年）。
- 8 渡辺武からの聞き取りによる。渡辺は1937年生まれ。1962年に学芸員として天守閣に就職し、1973年に同主任、1992年に同館長の要職を経て2000年に退職し、現在は天守閣の名誉館長である。総合調査については、前掲『図説 大阪城再見』で全般的概要について述べているほか、同著『大阪城秘ストーリー』（東方出版、1996年）でも言及している。また、Ⅲ章で取り上げる岡本良一については、同著『大阪城話』（東方出版、2003年）の中で、岡本が天守閣を定年退職する1968年まで「部下兼弟子として六年間を過ごした」と記し、その思い出について述べている。聞き取りは、2023年1月10日に天守閣応接室にて、現館長宮本裕次の同席の下、約3時間にわたって行なわれた。主な話題は、総合調査に関すること、

岡本良一が歴史博物館としての天守閣の機能充実に果たした役割および岡本の人となりについて、である。

- 9 『読売新聞』1959年3月13日1面。
- 10 以下、本節における大読の営業戦略については、特に断らない限り、読売新聞大阪本社編『読売新聞大阪発展史』（1995年）41～148頁の記述と、関連する新聞記事を参照している。
- 11 「鳴門観潮 学術調査に期待する」『読売新聞』1956年5月9日6面。
- 12 「映画の歴史と渦のナゾ」『読売新聞』1956年6月12日夕刊第7面。
- 13 前掲『読売新聞大阪発展史』139～142頁。
- 14 「豊公ただいま入城」『読売新聞』1958年10月12日9面。
- 15 敗戦直後から1950年代にかけての大阪城については、以下に注記する文献のほかに前掲『大阪城はこの姿』も参照している。
- 16 大阪城天守閣復興三十周年記念事業実行委員会編『大阪城天守閣復興三十年史』（1961年）10頁。
- 17 「干上る大坂城の濠」『読売新聞』1959年3月13日9面。ちなみに、岡本良一の語るところによれば、西外濠の湧きは、大阪城周辺に増加しつつあった高層ビルの建設によって、それまで濠の中へ滲出していた地下水が、途中でその水脈を遮断されたことと、これらのビルが冷房用その他に多量の地下水を汲みあげることに、その原因があると考えられたという（前掲岡本『大坂城』194頁）。
- 18 前掲岡本『大坂城』194頁。
- 19 「大坂城総合学術調査 期待の声」『読売新聞』1959年3月13日9面。
- 20 中馬馨編『大阪城一修復記録一』（大阪城修復委員会、1955年）44頁。
- 21 同前 77～78頁。
- 22 「大坂城学術調査団 メンバー14氏きまる」『読売新聞』1959年3月15日第9面。
- 23 同前。
- 24 前掲『読売新聞大阪発展史』141頁。
- 25 坂本太郎『古代史への道』（読売新聞社、1980年）268頁。
- 26 川上貢「村田治郎先生を悼む」（『建築史学』6号、1986年）170頁。
- 27 本節で総合調査の概要をまとめるにあたっては、表2にリストアップした読売新聞の記事と、前掲註3～5で取り上げた渡辺武・村山朔郎・村川行弘による研究成果を参照した。
- 28 「今なほ清冽な黄金水」『大阪朝日新聞』1931年11月5日14面。
- 29 「大坂城学術調査 まず金明水から」『読売新聞』1959年3月17日9面。
- 30 「“第二の石垣”を保存」『読売新聞』1959年12月28日9面。
- 31 1959年3月13日から29日にかけて計11回掲載された。
- 32 渡辺武からの聞き取り（前掲註8参照）。筆者も1959年12月下旬の朝日・毎日・産経の紙面を調べてみたが、発掘調査に関する記事は確認できなかった。
- 33 岡本のプロフィールについては、藤本篤「岡本良一先生の逝去を悼む」（『大阪の歴史』25号、1988年）、三善貞司編『大阪人物辞典』（清文堂、2000年／執筆担当者は内田九州男）を参照。
- 34 岡本良一「大阪城とわたし」（大阪建設業協会『月刊大建協』420号、1984年）。本稿では岡本良一論集編集委員会編『秀吉と大坂城 岡本良一史論集上巻』（清文堂出版、1990年）272～273頁を参照。

以下の引用で示す頁数も『秀吉と大坂城』の頁数である。

- 35 同前 271～278 頁。
- 36 渡辺武からの聞き取り（前掲註 8 を参照）。
- 37 「大坂城学術調査 いまの石垣は“徳川製”？」『読売新聞』1959 年 3 月 20 日 10 面。
- 38 岡本良一「二つの大坂城」（清交社『清交』1959 年 12 月号）。本稿では前掲『秀吉と大坂城』に収録されたものを参照。以下の引用で示す頁は『秀吉と大坂城』の掲載頁である。
- 39 同前 204 頁。
- 40 同前 204～205 頁。
- 41 同前 210 頁。
- 42 同前 214～215 頁。
- 43 岡本良一「地下に眠る豊臣氏大阪城の石垣」『城郭』1960 年 8 月号。本稿では前掲『秀吉と大坂城』に収録されたものを参照。以下の引用で示す頁は『秀吉と大坂城』の掲載頁である。
- 44 前掲『大阪城の謎〔図録〕』24 頁。
- 45 前掲岡本「地下に眠る豊臣氏大阪城の石垣」223 頁。
- 46 前掲岡本『大坂城』196～197 頁。
- 47 岡本良一「秀吉の大阪城を求めて—二十五年ぶりの調査報告書—」（『産経新聞』1984 年 7 月 2 日）。本稿では前掲『秀吉と大坂城』に収録されたものを参照。
- 48 例えば、中嶋久人「戦後歴史学・現代歴史学と都市史研究」、廉馥圭「韓国における植民地都市史研究の現況と展望」、池田真歩「成立期の近代都市と代議制」、町田祐一「近代都市下層社会研究の成果と課題」、松本洋幸「都市インフラと政治」、中村元「都市政治史の新展開」（いずれも『歴史評論』851 号、2021 年〔特集のタイトルは「日本近現代から都市史研究を考える」〕所収）、松山恵「複数の波が生んだ大きな潮流」、中村元「「都市史の自立」とその展開」（共に松沢裕作・高嶋修一編著『日本近・現代史研究入門』〔岩波書店、2022 年〕所収）。
- 49 戦後の都市史研究が皆無であると言いたいのではない。東京を事例とする研究では、戦後復興を取り上げた初田香成『都市の戦後』（東京大学出版会、2011 年）があり、再開発の政治史を取り上げた源川真希『首都改造』（吉川弘文館、2020 年）がある。それでも研究対象とされる時期の偏りは否めないと考えるのである。
- 50 前掲岡本『大坂城』193 頁。
- 51 渡辺武からの聞き取り（前掲註 8 参照）。
- 52 遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』（岩波書店、1968 年）。

#### 《付記》

本稿を準備するに際しては、多くの方々から貴重なご助力を賜った。特に、長時間にわたる聞き取りに快く応じてくださった渡辺武氏と、史料収集と考証の過程で貴重なご助言とご助力をくださった宮本裕次氏には、末尾ながら心より謝意を表したい。